次元形容詞「深い」にかかわる経験的基盤について

金 善花

【キーワード】
次元形容詞、イメージスキーマ、容器メタファー、経験的基盤、投影

【要旨】
本研究では、次元形容詞「深い」の空間的用法と非空間的用法における認知プロセスと動機付けについて考えてみた。その結果、「深い」の意味拡張において、容器のイメージスキーマによる拡張と具体的な経験による動機付けが深くかかわっていることが分かった。また、「深い」の意味が比喩的視点の投影のプロセスを介して、物理的な空間領域の容器のスキーマから、社会的な空間領域、心理的な空間領域としての容器のスキーマへと拡張されていく際、容器のイメージスキーマ自体が変容するのではなく、トポロジー的に継承されることが分かった。

1. はじめに

外部世界は、認知主体の視点から独立して存在するわけではない。われわれは、外部世界に関しなんらかのイメージを作り上げ、このイメージを介して外部世界の対象を把握する。言葉は、外界に埋め込まれた人間の認知のプロセスのあらわれであり、その背後には､外界の知覚と理解にかかわるさまざまな主観的な認知モードが反映されている。言葉の世界を把握していく際、この認知主体の外界認知にかかわる経験的基盤が重要な役割をになう。

本研究では、日本語の次元形容詞「深い」の空間的・非空間的用法における認知プロセスについて考察し､「深い」の空間的用法と非空間的用法における認知プロセス、動機付けが一貫しているのかどうか、もし違いが存在するとすれば、どのような違いなのかという観点から、具体例[1]を通して考えてみたいと思う。

2. 先行研究

2-1 日本語の次元形容詞のグループにおける「深い」と先行研究

日本語には 8 組の次元形容詞「長い・短い」「高い・低い」「深い・浅い」「遠い・近

[1] 日本語の例は、現代日本語書き言葉均衡コーパス（BCCWJ）、NINJAL-LWP for BCCWJ、筑波ウェブコーパスから収集し、中国語のほうは、北京大学中国语言学研究中心语料库（Centerfor Chinese Linguistics PKU）、语料库在线 http://www.cncorpus.org/から収集。

い」「広い・狭い」「太い・細い」「厚い・薄い」「大きい・小さい」が存在する。その中で、ヴェクトル性（ある基点からの一方方向）を含んでいる点で、「高い・低い」「深い・浅い」「遠い・近い」が区別される。この 3 組の次元形容詞の内、「遠い・近い」は、対象物そのものに備わった性質ではなく、2 つの対象、或いは地点間の隔たりを表す点で、区別される（国広 1971）。「高い・低い」「深い・浅い」は 1 次元量を表す点で共通しているが、水平面を基準にする場合、水平面に垂直の方向で、上向きにみた長さの大きいのが「高い」であるのに対して、水平面から下向きにみた長さの大きいのが「深い」であるという関係にある（西尾 1972）。

「深い」の先行研究には、国広（1971）、西尾（1972）、久島（2001）、小出（2000）が挙げられる。

国広（1971）は、「深い」について、ものの内部に関係があり、基準面とほぼ直角の方向ということが問題であることから、意義素を基準面からものの内部に向かってはいりこんで行く隔たりが標準値より大きいと指摘している。

西尾（1972）は、表面から底までの垂直にみた下方への長さが大きい、基準の面からみて、ずっと下のほうに位置していると解釈している。前者は、もののもつ量的な性質を表す意味で、後者は、ほかのものとの距離によってそのものの位置を示す意味であると述べている。

久島（2000）は、機能面を考慮し、次元形容詞をモノ類と場所類[2]に分けて整理し、「深い・浅い」を場所類の次元形容詞として扱っている。久島（2000）で、「深い・浅い」は場所と地点については、水平面を基準として鉛直という方向、下方という片方向の線的な量及び距離を表し、準場所については、本体の表面を基準とし、垂直という方向、内部へという片方向の線的な量及び距離を表すと述べている。

小出（2001）では、「深い」を空間的用法と非空間的用法に分けて記述し、空間的用法の典型性条件について、(1) 何らかの本体に属する内部空間を対象とする。(2) 内部空間内での延びの方向は、必ずしも下方とは限らず、水平方向もありうる。(3) 内部空間の開閉部を基準点にするが、基準点は明確でない場合が多い。(4) 内部空間は、安定性／堅牢性を持つ、開口部以外が閉じられたものでなくてもよい、密であってもよいという特徴を持つと述べている。

このように、今までの「深い」に関する研究は、語彙の意義特徴に焦点をおき、言語的な知識の記述と分析が中心になっているため、意味の捉え方の実態が明瞭だとは言えない。

そこで、本研究では、先行研究を踏まえながら、認知言語学の視点から、認知主体の

[2] 久島（2000）では、場所について、次のように定義している。(a) 周囲の自然と一体で、独立していないもの。人や物に存在空間を提供する機能を持つ。周囲から独立していてまとまりがあるが、人や物に存在空間を提供する機能を持つもの。(b)《準場所》とは、本体表面の一部を占めているものである。(c)《地点》とは、《場所》がどこに位置するかという観点から捉えたものである。

身体による経験的基盤との関連で、「深い」の認知プロセスや動機付けについて考えてみたいと思う。具体的には、3 で、アンケートを通して、「深い」の空間的用法における認知度の高い対象を抽出してから、相応する具体例を収集し、身体的経験や認知モードについて考える。4 で、「深い」の非空間的用法の具体例を収集・考察し、身体的経験と認知モードについて考える。5 で、「深い」の空間的用法と非空間的用法に見られる認知モードが一致しているのか、身体的経験や動機付けに変化があるかどうか、その相違点について考える。

3. 次元形容詞「深い」の空間的用法

「深い」の空間的用法において、認知度の高い対象を抽出するために、実質的なアンケート調査を実施し、表 1 のような結果が得られた。

調査方法

・調査目的：「深い」の広い意味の中で、典型性の高い意味を取り出すために、認知度の高い具体物を列挙してもらう。

・調査対象：日本語母語話者 100 人

・調査形式：アンケート用紙による設問形式をとる。アンケートを開始する前に、具体物について例を挙げて説明してから、回答してもらう。

〈サンプル〉

設問：「深い」ということばを聞いて、すぐ思いつく具体物を思い出す順番に、3 つ書いてください。

答：　第 1 位：○○、　第 2 位：○○、　第 3 位：○

No.	具体物	第 1 位	第 2 位	第 3 位	出現頻度[3]
1	海	61	16	6	83
2	谷	6	11	9	26
3	湖	9	9	5	23
4	川	3	11	9	23
5	森	2	6	14	22
6	穴	3	10	6	19
7	井戸	3	6	6	15
8	池	3	5	4	12
9	プール	4	3	4	11
10	沼	2	5	4	11
11	溝	1	2	4	7
12	傷	0	1	6	7
13	洞窟	0	3	3	6
14	谷底	2	0	2	4
15	霧	2	0	2	4
16	トンネル	0	2	2	4
17	どんぶり	0	3	1	4
18	山	2	0	2	4
19	箱	0	3	1	4
20	皿	0	3	1	4

表 1　日本語の次元形容詞「深い」に関する調査結果

次元形容詞「深い」の調査結果から、くぼみのある容器のイメージ[4]を持つ対象が多く見られることが分かる。容器とは、一つの開閉部を持ち、他の面が閉ざされている入れ物を言う。

- 「容器」には、以下のような特徴がある。①空間的境界線によって「内側」と「外側」という領域ができる。②容器の外側から内側へ、あるいは内側から外側へ、内容物（content）を出し入れする。③容器も内容物も、ともに「物体」である。

[3] 本研究では、合計出現頻度が 3 以上（3 を含む）の事例を対象とする。
[4] イメージは、具体的な経験にもとづいて形成される心的表象の一種である。

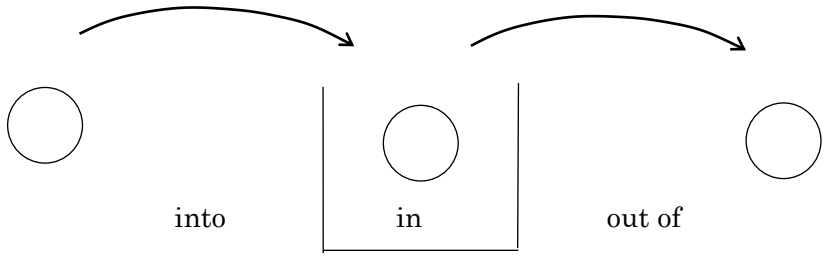


図 1[5]

（谷口 2003：27）

容器の形を持つかどうか、容器の特徴を持つかどうかによって、表 1 で挙げられた「深い」の認知対象を、次のように分類することができる。

① 容器の形を持ち、容器の特徴を持つ事物

[1]「海、湖、川、穴、井戸、池、プール、沼、溝、洞窟、どんぶり、箱、皿」

② 容器の形を持たないが、容器の特徴を持つ事物

[2]「谷、森、山、霧、トンネル、谷底」

③ 容器の形を持つが、容器の特徴を持たない事物

[3]「傷」

この中で、「海、湖、川、穴、井戸、池、プール、沼、溝、洞窟」のような移動不可能な容器事物が 210 例挙げられ、「谷、森、山、霧、トンネル、谷底」のような事物が 64 例、「どんぶり、箱、皿」のような携帯可能な容器事物が 12 例、「傷」が 7 例挙げられた。

① 容器の形を持ち、容器の特徴を持つ事物

[1]「海、湖、川、穴、井戸、池、プール、沼、溝、洞窟、どんぶり、箱、皿」

容器の形を持ち、容器の特徴を持つ事物[１]は、アンケート調査で 210 例挙げられ、認知度が一番高い。[1]の対象は、一つの開閉面を持ち、他の面が閉ざされた内部空間を持つ事物であり、はっきりとした空間的境界線を持っている。「～の中に入る（入れる）」あるいは「～の外へ出る（出す）」のような内容物の出入りに関連する表現もできる。したがって、[1]の事物を、容器の形と容器の特徴を持つ容器事物と言えるだろう。容器事物[1]の内、「海、湖、川、穴、井戸、池、プール、沼、溝、洞窟」のような対象は、地面と固定的な関係を持つ移動不可能な容器事物であるのに対し、「どんぶり、箱、皿」のような対象は、携帯可能な容器事物である。

また、[1]の容器事物には、認知主体の視界が底まで届かず、閉ざされた空間内での視界が悪い特徴が見られる。

[5] 図の順番は本論でふりつけたものである。

（1）深い海の中は太陽の光がとどかないために、ライトがついています。
（海底下に広がる未知の世界「地下生命圏」）
（2）その波に溺れて、波の底に足をとられていた。それは、暗く、深い沼である。
（大庭みな子 浦島草）
（3）もちろん、飛び込んだと思われたプールの底は真っ暗で何もあるはずもなかったのである。
（不思議館～不気味で神秘的な話～）

例（1）（2）（3）で見られるように、認知主体が直接経験しているわけではないのに、「海、沼、プール」の内部空間は真っ暗で、視界が悪いと認識されている。それには、容器事物の内部空間には､太陽光が届かないという経験が働いていることが考えられる。容器事物の内部空間の視界が悪いのは、〈見立て〉複合モデルの〈光モデル〉[6]にもかかわっている。

② 容器の形を持たないが、容器の特徴を持つ事物
[2]「谷、森、山、霧、トンネル、谷底」
[2]に見られる対象は、容器の形を持っているとは言えない。「トンネル」は二つの開閉部を持ち、「谷底」は平面であるため、内部空間を持っていない。「谷、森、霧、山」は、必ずしも一つの開閉口を持っているとは言えないし、部分的に周囲と繋がっているため、はっきりとした空間的境界線を持つとは言いにくい。

・ しかし、あるものが、他のものとはっきり分離していなかったり、境界が明らかでないような場合でも、われわれはそれらをたとえば山であるとか街角であるとか生け垣というようなカテゴリーに分類する。物理的な現象をこのようなやり方でとらえる必要があるのは、われわれの持っている目的――たとえば、山の所在位置を突き止めたり、街角で人と会ったり、生け垣の刈込みをやるといった目的――を満足させるためである。人間の目的というのは、人為的に境界を設定して物理現象をわれわれ人間と同じようにはっきり個別化することを――境界面をもつ存在物化することを――われわれに要求するのである。
（Lakoff,G.,and M.Johnson 1980：37-38）

このように、人為的に境界を設定する際、われわれは自分自身を内と外という方向性

[6] 複合的視点からみた見立てのモデルには、光モデル、分解モデル、把握モデル、着地モデルが考えられる。〈光モデル〉の見立てを反映する表現としては、「光が当たる」、「明らかになる」、「明るみになる」、「白日の下にさらされる」などの例が考えられる。これにたいし、「その問題が分かる」、「謎が解ける」のような表現は、〈分解モデル〉の見立てにもとづく表現の典型例と言える。「彼の意図を把握する」、「問題のポイントをつかむ」のような表現は、〈把握モデル〉の見立てにもとづいている（山梨 1998：133）。

を持つ一つの容器と考え、表面によって境界を接している他の物理的物体にも投影して考える。だから、それらの物体もまた内側と外側をもった容器であるとわれわれはみなす。このような投影により、はっきりとした空間的境界線を持たない[2]の事物に、容器のイメージが作り上げられ、容器の特徴も付与されることが考えられる。

（4）月山の雪渓で父は強風にあおられて、深い谷に転げ落ちそうになったことがあった。

（斎藤茂太 いま家族しか子供を守れない）

（5）ＡＣへ登り返す体力と気力が残っていない場合、そこは雪も消えた深い谷底で風も当たらないので、ビバークしてもいいと考えていた。

（田中昌二郎 より高く、より遠く、未知を求めて）

例（4）の「谷に転げ落ちる」のような出入り関連の表現から、谷を容器として認識し、例（5）の「風もあたらない」ことから、谷底を底に、その上部の空間領域を内部領域として、目に見えない壁を持つ容器として認識されることが考えられる。

「山、森、トンネル」も、「人が山（の中）に入る、探検隊が森（の中）に入る、新幹線がトンネル（の中）に入る」のような出入り関連の表現から、容器として認識されていることが分かる。「深い山、深い森」は、人があまり行かない未開拓の空間領域を言うが、これは、容器の入り口から遠く離れているところは深いという経験の投影だと考えられる。

「霧」には、次のような具体例が見られる。

（6）出発時は深い霧の中。

（Yahoo!ブログ 2008）

（7）冬の北イタリアは冷たく深い霧にすっぽり包まれる。

（石本正『絵をかくよろこび』）

（8）ラングドンはそれを見つめながら、今宵を覆っていた霧が一段と深くなるのを感じた。

（ダン・ブラウン『ダ・ヴィンチ・コード』）

（9）パフィオの自生地は湿地かそれに近い所、ないしは毎日深い霧が数時間はたちこめる所だ。

（江尻光一『洋ラン栽培コツとタブー』）

例（6）では、「霧」が「内」と「外」の空間を持つ事物と認識されていることが分かる。しかし、その境界線は、霧の濃度が上昇し、周囲との境界線が目立つ時に限り、一番はっきりしていると言える。例（7）（8）では、何かを包んだり、覆ったりすることから、容器の空間的包容性が窺える。例（9）では、「数時間たちこめる」ことから、「霧」

は山や河のように恒常性を持たず、一時性を持つことが分かる。「霧」の濃度が上がり、視覚的に境界線がはっきりしてきた段階で、「深い」と認識されるという時間の制限があるため、認知度も比較的に低いだろう。この一時性の特徴は、「深い」と認識される他の事物と大きく違う点でもある。

[2]の事物にも、底まで視線が届かず、視界の悪い特徴が見られる。

（10）川が見たい、川の向こうが見たいのに、霧が深くて見えないの。
（神沢利子 『空色のたまごは』）

（11）三合目までは深い森の中で視界もなく、なんとなく暗い感じの道を下っていく。
（津野祐次 『中央アルプスを歩く』）

（12）オートバイのライトをハイビームに切り替えて点灯すると、反対側から車両の来ないことを確認して一気に真っ暗なトンネルを潜り抜けた。
（臼井基也 『彼岸祥風』）

（10）（11）（12）では、「川の向こうが見えない」「森の中で視界もなく」「真っ暗なトンネル」のような表現から、[2]の事物も視界が悪く、非可視的な性質を持つことが分かる。[2]の事物には、容器の入り口から遠く離れているところは深い、内容物の濃度が上がると、視界が悪くなる、という経験的基盤が働いていることが分かる。

③ 容器の形を持つが、容器の特徴を持たない事物。

「傷」のような事物は、はっきりとした境界線を持つため、容器の形は持っていると言える。しかし、「傷」は一時的な外力による産物で、何かを入れるための空間ではないため、本当の容器だと言いにくい。

（13）キズが深かったので、血をもう少し出した方が良いと思ったからです。
（Yahoo!ブログ 2008）

（14）ひかりはファリードにふりそそぎ、そうして深い傷はみるまになおったのです。
(村山早紀『シェーラひめのぼうけんダイヤモンドの都』)

（15）僕は岩にガリっとこすって結構深いキズつきましたが、あまり変わりませんよ。
（Yahoo!知恵袋スポーツ 2005）

例（13）で「血を出す」ことから、「傷」は内部空間を持つ事物と認識されていることが分かる。例（14）の「みるまになおる」、例（15）の「こすってきずがついた」ことから、本来存在しないものが、外部作用によって生成され、時間の推移によって消失するという、一時性が確認できる。[2]の「霧」に見られる一時性と類似しているが、「霧」は自然現象による一時的な事物であるのに対し、「傷」は外部作用による一時的な事物である点で、違いが見られる。

このように、「深い」の空間的用法では、容器である認知主体の身体を、空間内に存在する事物に投影し、容器のイメージを作り上げ、また、経験的基盤の投影によって認識する認知プロセスが窺える。

4. 次元形容詞「深い」の非空間的用法

「深い」の空間的用法では、容器のイメージスキーマによる意味拡張が見られた。容器のイメージスキーマは、意味の拡張に関係しているだけではなく、このスキーマに対する主体の視点の投影によって、さらに主観的な意味の拡張を可能としている。

・ 一般に、容器のスキーマを問題にする場合には、限定された空間領域への出入りが問題にされる。

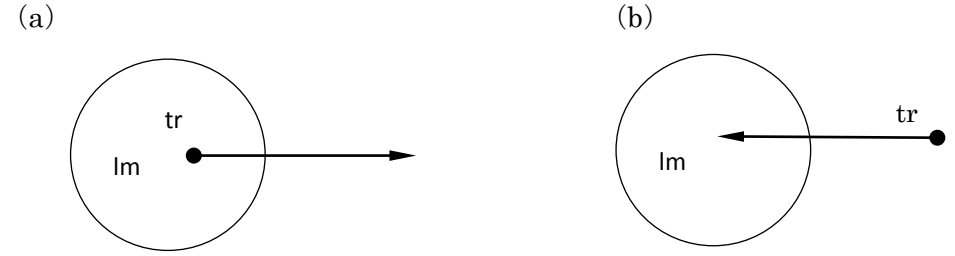


図 2

しかし、ある限定された空間領域への出入りは、容器のスキーマにかかわる複合的な視点の一つにすぎない。状況によっては、この空間領域の内（ないしは外）に何が存在するか、その存在が出入りモードにどのようにかかわっているのか、この内と外の境界領域のどちらに焦点が当てられているのか、この空間の境界領域を内から見ているのか外から見ているのか、といった複合的な視点が、言葉の意味の拡張に際し重要な役割をになう。　（山梨 2000：144）

西尾（1972）は「深い」と結びつく具体名詞を 6 つに整理している。
①視覚的なもの（色、闇、影など）②時を表すもの（秋、冬、夜など）③関係に関連するもの（関係、つながり、仲、交際など）④感情を表すもの（愛情、悲しみ、怒り、信頼、疑い、失望、敬意、感動、印象など）⑤知的な作用を表すもの（考察、考え、理解、思想、教え、意味、理由、事情、原因、わけ、経緯など）⑥その他（罪など）

次では、西尾（1972）の整理を参考に、6 種類の具体名詞の具体例を見ることにする。
① 視覚的なもの（色、闇、影など）には、次のような具体例が挙げられる。

（16）その山の緑も、黒に近いような濃い深い色である。
（NHK「聖徳太子」プロジェクト『聖徳太子信仰への旅』）

（17）彼が目を凝らしても、肉眼で見えるのはときたま不鮮明になる画面のぶれや暗示的な光の明暗効果、つかのま深い影のなかを走りすぎる動きくらいだった。
（セオドア・ローザック『フリッカー、あるいは映画の魔』）

（18）羽交い締めにされた体の感覚も消えて、やがて、自分という人間の意識さえも深い暗闇に飲み込まれた。
（藤原眞莉『姫神さまに願いを』）

例（16）の「深い色」は、植物の緑の色を言う。植物の色は、芽生えの初期は鮮やかで薄い緑の色をしているが、時間の経過によって、色素の沈着が生ずるため、色は少しずつ暗くなり、濃くなっていく。布などを色染めする際にも、色染めを重ねるほど、濃度が上がり、周囲との境界線がはっきりしてくる。このように、はっきりとした境界線を持ち、色という内容物を積み重ねられる特徴から、「深い色」を容器として見立てることができるだろう。また、例（17）の「深い影の中を走る」、例（18）の「深い暗闇に飲み込まれる」のような表現から、「影」と「闇」は内部空間を持ち、物体の出入りが可能な容器として認識されていることが分かる。容器内の内容物の濃度の上昇につれ、その重量も増えて、結局徐々に容器の底に落ちてくる経験から、色のような視覚的な対象は、濃いほど落ち着きを感じられると考えられる。

五感と関連する例には、「深い味」も見られる。

（19）時間差で辛さと後味が感じられる深い味。
（「平尾由希の ON AIR Kitchen」Powered by Ameba）

（20）むしろ味噌の甘みと梅の酸味がマリアージュし、もう一段階深い味になる。
（小山薫堂のニッポンの食べる調味料をつくるプロジェクト）

（21）なかなかグロテスクだが、こうして熟成させることが深い味を生み出す秘訣。
（全国中央駅めぐり・泉中央駅）

例（19）（20）（21）から分かるように、「深い味」とは、いろんな旨味がバランスよく含まれ、時間をかけて熟成させた後味を持つ美味しい味を言う。ここで、「深い味」はいろんな味の内容物によって詰められた容器として見たてていることが分かる。「深い味」に入っている内容物が多いほど、味が深くて美味しいと感じられる。このように、視覚的なものや味覚的なものの認知活動にも、五感による経験的基盤が働いていることが分かる。

② 時を表すもの（秋、冬、夜など）

（22）今はもうその声を運ぶためにのみ走っているというように列車は深い夜の中を走っています。
（新川和江詩集）

時間を表すものは､時間軸において､始点からの線的距離が大きいという意味を持つ。四季という容器には､「春、夏、秋、冬」という内容物が入っている。一年の始まりが春から始まることから、容器に見立てても、容器の開閉部から「春、夏、秋、冬」の順番に並んでいると考えられる。容器の開閉部と近い「春、夏」には、光が当てられ、明るくて暖かいイメージを持つが、容器の底に近い「秋、冬」には、光が当てられないため、視界が悪い。したがって､「春、夏」は「秋、冬」より暖かく、明るいイメージ持つことが考えられる。「深い昼」と言わないのも、同じであろう。

③ 関係に関連するもの（関係、つながり、仲、交際など）

(23) 配偶者の事、子供の事、家の事、それぞれの深い関係の中に、人々は生きている意味を見いだしているんです。

（子どもの本の森へ/ウェブリブログ）

(24) 言葉を超える、深いつながり、親近感や、信頼感を自然に抱いてもらえます。

（自宅で学べる宝地図ﾑｰﾋﾞｰ）

(25) 会社人間の持っている社会的ネットワークは、強くて深いつながりを狭い範囲で濃密に持っている。

（日経 CSR プロジェクト）

例（23）（24）（25）から分かるように、関係に関連する「深い」は「複雑な、込み合った」などの意味に近く、事態の表面だけでは捉えられず、表面的な観察を越えたところまで伸びているという意味を表す。これは、おびただしい内容物が密に詰められ、底までの見通しが悪いという経験が投影されていると考えられる。

④ 感情を表すもの（愛情、悲しみ、怒り、疑い、失望、敬意、感動、印象など）

まず､「深い愛」の具体例を見てみよう。

(26) 今は櫻井先生のおかげで前よりも深い愛の中にいるようです。

（別れた彼ともう一度恋に落ちる！復縁必勝プログラム）

(27) ありがとう、僕を励まし、支え、深い愛で包んでくれて。

（ありがとうは光の言葉）

(28) また､楽しい深い愛に浸っている時に､ふと､非常に悲しい夢をみることがある。

（豊島与志雄 夢）

(29) しかし、そのささいな話しの中に、船越さんの深い愛がたくさん詰まっていると感じたのです。

（船越桂「個人はみな絶滅危惧種という存在」）

（30）しかし、悪いことであったとしても、それを信仰の目で見るならば、どこかに神の深い愛が満ちあふれています。

（復活節第 2 主日）

（31）彼女の清らかな歌声は、さまざまな困難を乗り越えてかけがえのない一つの命を手に入れた母の喜びと、この詩に対する感謝と深い愛が込められており、聴くものの魂を揺さぶります。

（「わたしがあなたを選びました」）

（32）これまた初孫に海より深い愛を注いじゃうんでしょうね。

（My hotelier 172　ーハロー！マイ・ベイビーー）

例（26）（27）（28）では、認知主体を中に包み込み、愛というお風呂に浸かるような表現から、「深い愛」が容器事物として認識されていることが分かる。例（29）～（32）の「深い愛が詰まる」「深い愛が満ちあふれる」「深い愛が込められる」「深い愛を注ぐ」のような表現から、ここでの「深い愛」は容器として認識されるのみではなく、容器の内容物としても認識されていることが分かる。つまり、例（26）（27）（28）では、容器のイメージスキーマが前景化され、例（29）～（32）では、容器のイメージスキーマが背景化され、内容物のイメージスキーマが前景化されている。ここで、「深い愛」は容器物質[7]であることが分かる。

「深い愛」は表面に出さず、心の深いところにおいて、累積してきた純粋な感情が強いという意味を表す。このような捉え方は、累積してきた物質の量を測るためには、容器が必要となるが、容器の外に出ている物質には意味がなく、容器に入っている内容物の量が多いほど、価値が高いという経験が感情領域へ投影されていると考えられる。したがって、表に出さず、心の奥に積み重ねてきた感情は、本物であり、価値が高いと認識されるだろう。

次の具体例から、「深い悲しみ」も容器物質であることが分かる。

（33）深い悲しみの中に身を閉ざしてしまった自由。

（StarChild:十兵衛ちゃん２　～シベリア柳生の逆襲～）

（34）協会は深い悲しみにつつまれた。

（社団法人京都府聴覚障害者協会-協会について）

（35）その深い深い悲しみに沈んだ瞳を向けられた瞬間──。

（『今昔物語集』　京都せんべい おかき専門店【長岡京小倉山荘】）

（36）絶望的な深い悲しみに浸り、路地に腰掛ける少女は身体を斜めに傾けて、うつむいて佇んでいる。　（『散り行く花』（1919）良い映画を褒める会）

[7] 容器にもなり、容器の内容物にもなるものを容器物質と言う（Lakoff ＆Johnson）。例えば、「水」はコップなどに入れると内容物になり、それに何かを入れると容器になる。

（37）深い悲しみに落ち込んでいる人にとっては思いやりのある、暖かい言葉は何よりも力強い励ましです。

（こころの便り）

（38）そしていまだ多くの方々が行方不明となっていることに深い悲しみで一杯です。

（～与える存在である自分への信頼～）

例（33）～（37）に見られる「深い悲しみの中」「深い悲しみに包まれる/沈む/浸かる/落ち込む」のような表現から、「深い悲しみ」を物質の出入り可能な容器として認識していることが分かる。例（38）では、「悲しみ」という気持ちが内容物としてたくさん詰められていることから、例（33）～（37）で前景化された器のイメージが、例（38）では背景化され、内容物が前景化されていることが分かる。

感情を表すものには、「愛、悲しみ」などのほかに、外部の刺激によって生ずる感情の具体例も見られる。

（39）心を揺さぶる深い感動を与えてくれる映画。

（子ども映画祭 | 児童健全育成推進財団）

（40）中島家の居間に飾られた一枚のお皿が、私に深い印象を与えた。

（劉徳有『時は流れて』）

「深い感動、深い印象」のような表現は、はっきりした特定の感情ではないが、強く感受されているという意味を表す。このような感情は、「深い愛」や「深い悲しみ」のように量的な累積による感情ではなく、外部の刺激によって作られる感情である。これは、「深い」の空間的用法の「深い傷」と類似性が見られる。「深い傷」は、外部の刺激によって形成される容器の形は、時間の推移によって治ったり、無くなったりする。「深い感動、深い印象」のような感情も、認知主体の心という容器が、外部の刺激によって、一時的に感受される感情である。つまり、外部の刺激によって生成する点で、類似性が見られる。したがって、「深い感動、深い印象」のような感情は、空間的用法の「深い傷」の容器イメージスキーマが感情領域へ投影された用法と言えるだろう。

⑤ 知的な作用を表すもの（考察、考え、理解、思想、教え、意味、理由、事情、原因、わけ、経緯など）

（41）こういう深い考察を入れておいたほうが、英語というものは、分かりがいいわけですし、書き換え時などに間違いが減ります。

（家庭教師田口の視点）

（42）悦子はあまり深い考えもなく、友達のつもりで軽く応じたのである。

（深谷忠記『指宿・桜島殺人ライン』）

（43）共に生きるという共生の精神の根底に人間に対する深い理解があることは当然であろう。

（上田廣『共生の基礎知識』）

（44）エリスはイギリスの医者だが、文学と科学の問題に没頭し、なかなか深い思想を持っていた人である。

（北杜夫『どくとるマンボウ医局記』）

（45）深い意味がこもった質問だった。

（バーバラ・デイリー『再会は命がけ』）

例（41）～（45）では、「考察、考え、理解、思想、意味」が容器の内容物として認識され、事態の表面だけでは捉えられず、表面的な観察を越えたところまで伸びているという意味を表す。考えや理解という内容物は、少しずつ累積され、一定の量になると、容器の底に落ちてくる。容器の中に浮いているのではなく、容器の底に着地していることから、安定性と価値が高いと認識されることが考えられる。このような捉え方には、複合的視点からみた見立ての着地モデルが働いている。

（46）前から感じていたが、猪喰には、男具那にもいえない深い事情がありそうだった。

（黒岩重吾 『白鳥の王子ヤマトタケル』）

（47）脳のこうしたちょっぴりマヌケな性質には、じつに深い理由があるのです。

（池谷裕二 『高校生の勉強法』）

例（46）（47）の「深い」は「詳しい、複雑な、込み合った」などの意味に近い。「深い事情、深い理由」は、事態の表面だけでは捉えられず、表面的な観察を越えたところまで伸びているという意味を表す点で、例（41）～（45）と類似しているが、おびただしい内容物が底に近づくほど、安定し、真実が隠れているという経験的基盤が働いていると考えられる。このように、同じ容器メタファーによる認知プロセスのなかでも、認識主体がどこに視点をおくかによって、働きかける経験的基盤が変わってくることが分かる。

⑥その他（罪など）

（48）母が亡くなってからそんな事ばかりが思い出されて、後悔という悲痛な虚しさに深い罪意識を感じてきた。

（生きる）

（49）そうではなくて、自分の深い罪は償ってもつぐないきれないと感じることです。

（お講さまの法話原稿-10）

例（48）では、後悔しても取り戻せない罪悪感という意識を言い、例（49）では、「償ってもつぐないきれない」のような表現から、「深い罪」は法律的な裁きの対象となる罪ではなく、人間性や道徳に反する罪であることが分かる。つまり、人間性や道徳の領域を区切る境界線を超えたものとして、理解してもいいだろう。また、認知主体の持つ身体の容器性が、道徳などのような意識領域へ投影されていると解釈できるだろう。

4. まとめ

4-1　認知プロセスと動機付け

・ 人間の創造的な理解には、少なくとも次のような認知プロセスがかかわっている。

A.ある対象に関し具体的なイメージを作り上げて行くプロセス。

B.ある対象のイメージを他の対象に拡張していくプロセス。

C.ある対象のイメージを多角度的な視点から組みかえていくプロセス。

（山梨 2000：140）

上の認知プロセスのなかで、「深い」の空間的用法では、具体的な経験によって、容器のイメージを作り上げていく認知プロセスを介して、身体経験を基盤とする容器のイメージスキーマによって、動機付けしていくことが分かった。

「深い」の非空間的用法では、容器のイメージスキーマを社会的な空間領域、心理的な空間領域のような抽象的領域へ投影し、多角度的な視点をシフトする認知プロセスがかかわり、具体的な経験を基盤とする容器イメージスキーマによって、動機付けしていくことが分かった。

4-2　イメージスキーマのトポロジー的継承

「深い」の空間的用法では、容器が「内側」と「外側」を持つかどうか、はっきりとした空間的境界線を持つかどうか、物体の出入りが可能かどうか、というような「容器」の特徴に視点が置かれることが多く、容器のイメージスキーマを前景化する認知モードが多く見られる。一方、「深い」の非空間的用法では、容器のイメージが背景化され、容器の底に近いかどうか、内容物の密度が高いかどうか、一時的であるかどうかなどのような主観的認知視点が前景化されることが多く見られる。

「深い」の意味が、比喩的視点の投影のプロセスを介して、物理的な空間領域としての容器のスキーマから、社会的な空間領域、心理的な空間領域としての容器のスキーマへと拡張されていく。しかし、この場合に、容器のイメージスキーマが他のスキーマに変換しているわけではない。「深い」の非空間的用法における容器のイメージスキーマそれ自体は､心理的な実在性を持って意識されながら､認知主体の視点の変化によって、前景化されたり背景化されたりする。つまり、容器のイメージスキーマ自体の心理的実在性は､「深い」の空間的用法から非空間的用法への比喩的な拡張のプロセスを経ても、トポロジー的に継承されることが分かった。

参考文献

Lakoff,G.,and M.Johnson (1980). *Metaphors We Live By.* The University of Chicago Press.
渡部昇一・楠瀬淳三・下谷和幸訳（1986）『レトリックと人生』大修館書店

金善花（2017）「「深い」のプロトタイプに関する日中対照研究」『言語をめぐる *x* 章―言語を考える，言語を教える，言語で考える―，仁科弘之教授退職記念論文集（埼玉大学教養学部リベラル・アーツ叢書別冊 2)』河正一・島田雅晴・金井勇人・仁科弘之（編），pp.167-185.

金善花（2016）「「長い」のプロトタイプに関する日中対照研究」『ことばの本質を求めて，小出慶一教授退職記念論文集（埼玉大学教養学部リベラル・アーツ叢書別冊 1)』河正一・金井勇人・仁科弘之（編），pp.122-134.

久島茂（2001）『《物》と《場所》の対立―知覚語彙の意味体系―』くろしお出版

國廣哲彌（1970）「日本語次元形容詞の体系」『言語の科学』2，pp.13-26．東京言語研究所

小出慶一（2000）「次元形容詞の空間的用法と非空間的用法」『群馬県立女子大学紀要』21，pp.1-13．群馬県立女子大学

谷口一美（2003）『認知意味論の進展開―メタファーとメトニミー―』研究社

西尾寅弥（1972）『形容詞の意味・用法の記述的研究』国立国語研究所／秀英出版

松本曜編（2003）『認知意味論』大修館書店

籾山洋介（2010）『認知言語学入門』研究社

山梨正明（2000）『認知言語学原理』くろしお出版

朱德熙（1956）《现代汉语形容词研究》《语言研究》第 1 期

陆俭明（1989）《说量度形容词》《语言教学与研究》第 3 期

（埼玉大学大学院人文社会科学研究科博士後期課程）